日本語能力簡易試験としての「聞きテスト」

ー解答形式の漢字要因に関する分析ー

小林　典子　　丹羽　順子　　山元　啓史

要　旨

筆者らが開発した日本語能力簡易試験は、1文レベルの聞きとりテストである。テープを聞きながら、同時に解答用紙に書かれた同じ文の1カ所の空欄（文法項目部分）に聞こえた音を、ひらがな1字分、書き込む形式のものである。このテストは、筑波大学のプレースメントテストの文法、及び総合得点との間に高い相関を示している。テストは10分程度しかかからない上、採点処理も単純であるため、日本語能力簡易試験としての利用が考えられる。

本稿では、解答用紙2形式（漢字仮名交じり、平仮名のみ）と漢字能力の差（3水準）がテストに与える影響を調べた結果、2形式の間に有意な差が認められなかった。

〔キーワード〕　聞きテスト　平仮名1字穴埋め　漢字要因
プレースメントテスト　　日本語能力簡易試験

Aural Recognition Test as a Simple Test of Japanese Language Abilities : analysis of effects of kanji on answer sheets

Kobayashi, Noriko　Niwa, Junko　Yamamoto, Hilofumi

This paper discusses the aural recognition test devised by the authors. Subjects were asked to listen to a tape and fill in an answer sheet at the same time ; the sentences heard on the tape appeared on the answer sheets with blanks which were to be filled in with a single hiragana character representing a grammatical item. There was a high correlation ($r=0.82$) between scores on the grammar section of the placement test and scores on this aural recognition test. As the test requires no more than ten minutes to administer and is also easy to grade, it should be applicable as a simple test of Japanese language abilities.

The answer sheets in the past tests were written in mixed Kanji and Kana format, so a need was felt to determine whether differences in Kanji abilities among subjects had an effect on test results. Two types of answer sheets were prepared, one written using Kana alone and the other using both Kanji and Kana, in order to examine this Kanji factor. No significant difference could be seen between a group administered the answer sheets written in the mixed style and a group administered answer sheets written in Kana alone.

1．はじめに

ここで紹介する「日本語能力簡易試験」というのは、そもそもは、日本語能力を診断することを目的として、考案されたものではなかった。これは、外国語の音声聴取に関して、「知っていることは聴取できるが、知らないことは聴取できない」であろうという仮説をたて、これを実証することを目的としたものであった。そして、知識の有無の対象として文法項目を取り上げ、これの聞き取りテスト（以後「聞きテスト」と呼ぶ）を試みたわけである。1991年春期以降、これまでに年2回、計5回テストを実施した。その結果は、小林他（1992）及び、フォード他（1993）で報告したように、「聞きテスト」の得点と筑波大学留学生センターのプレースメントテストの文法、及び総合得点との間に高い相関があることが分かった。

「聞きテスト」は、音声テープを聞きながら解答するテストであるために、一見、聴解テストをしているように見えるし、受験者もそのような心理状態で受験しているようであるが、これは聴解テストと呼べるものではない。課せられているのは、文法項目部分の穴埋め書き込みであるわけで、むしろ文法能力を測るテストと言うほうがよいだろう。

そこでこの「聞きテスト」を簡易な日本語能力診断テストとして利用できるのではないかという視点に立ち、本テストについて考察を進めている。本稿では特に「聞きテスト」の解答形式について取り上げ、その漢字要因について考察する。

2．「聞きテスト」の概要

2．1　テスト形式

「聞きテスト」は、例えば下記に示すようなものである（添付資料参照）。各文の頭の数字は問題番号で、テープからはナチュラルスピードで次から次へと、このような問題が読み上げられる。受験生は空欄になっている（　）の部分の平仮名1字を聞き取って、書き込むことが要求されている。一つの問題が終わって、次の問題にいくまでのポーズは2秒間である。従って、受験生は、寸時に問題を処理することが要求される。熟慮してから解答するというわけにはいかない。65問を約10分で終わる。

1.そこ（で）何をしてるんですか。
2.あの人は日本では有名（な）人ですよ。
3.今度、映画見（に）行かない。
4.その中（に）何入ってんの。

48.就職した（か）らといって、勉強が終わったというわけじゃないよ。
52.すみませんが、ちょっと手伝っていただ（け）ませんか。
59.だから私はそういう（ふ）うに思いました。

2．2　プレースメントテストとの相関

筑波大学では、春期と秋期、年2回、日本語のプレースメントテストを実施している。このテストは、文法、聴解、読解、漢字、の各セクションに分かれており、所要時間は約2時間半である。このプレースメントテスト（以後「プレース」と呼ぶ）を受験した留学生に対して、1991年春期以来、「聞きテスト」を行ってきた。

1991年春期の「聞きテスト」は全部で61問で、「プレース」との相関は表1の通りであった。

表1　プレースメントテストと「聞きテスト」の相関係数

（1991　春プレースメントテスト実施　データ数158人分）

	文法	聴解	読解	漢字	総合点
聞きテスト	0.81	0.75	0.69	0.61	0.82

また、フォード他（1993）では、この「聞きテスト」を利用して、文法項目の習得状況を観察している。1991年秋期実施の「聞きテスト」は、更に文法項目の選択に検討を加え、最終的に、初級文法項目[1]を全体の2/3、中上級レベルの文法項目を1/3とし、中に対話形式6問[2]も含め、計65問を準備した。この第2版の「聞きテスト」と、「プレース」との相関は文法が0.82、総合点が0.84であった（データ数137人分）。この時の、文法得点（30点満点）を縦軸に、「聞きテスト」（65点満点）を横軸にとった散布図は図1のとおりである。おおよその目安でしかないが、筑波大学の日本語補講コースの各レベルと、どのように対応しているかを、散布図の下に示してある。また、そのレベルの各開設クラスの中で使用されているテキストの中から、代表的なもの[3]を示しておく。これまでのテスト結果の観察から、60点前後は日本語能力試験の1級合格レベルとみなしてもよさそうである。

2．3　テストの特徴と問題点

2．3．1　「聞きテスト」の特徴

「聞きテスト」の特徴としては次のようなことが挙げられる。

1）クローズテストとは異なり、空欄になっているのは文法項目に限られており、1文中1ヶ所だけである。

2）答えを音声で与えてしまうので、耳にも注意が向けられることになる。文法項目の分かる受験者にはこの音声が聞き取れるが、分からない受験者には、かえって、誤りを誘発する（音声に惑わされるため）働きをしていることが観察される。中国語話者の受験者から、音があるのでやりに

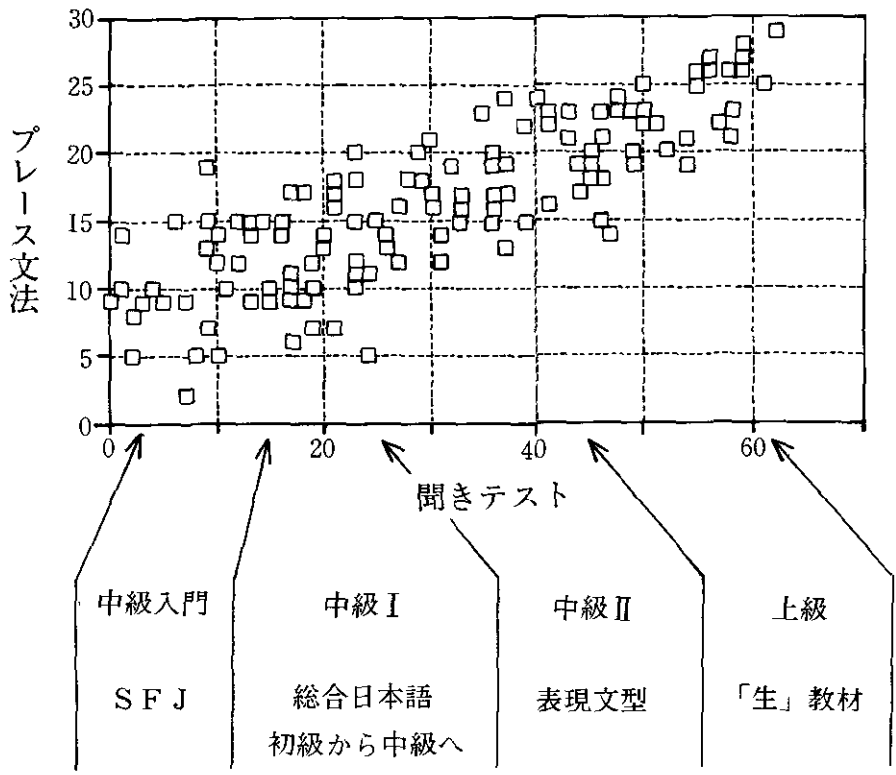

図１.「プレースメントテスト」の文法得点と「聞きテスト」の得点分布
（1991　秋プレースメントテスト実施　データ数137）

くいという意見が出されてもいる。

３）音声なしに、空欄を埋めさせる問題を作成するときには、複数正解を避けるように注意しなければならないが、音声を与えることによって、この点については解決できる。

４）テープから流れる音声は、ナチュラルスピード、かつ、問題間のポーズは２秒であることから、受験者は瞬時に判断できる能力を要求される。従って、自然な言語速度で理解できるレベルまで定着していなければ、解答できない。知識としては持っているが運用できないというようなレベルでは解答できないのではないかと考えられる。

５）音声テープがペースメーカーの働きをするので、ほぼ10分の短時間の内に65問のテストを終了させることができる。つまり、テスト問題の前半だけで時間切れになって終わるというようなことはない。

６）テストの実施、及び、処理が単純に誰にでも実施できる。従って、日本語教師でなくても、短時間に結果を出すことができる。

７）この得点は「プレース」との相関が高いことから、クラス分けの判断に利用できる。

これまで、「聞きテスト」を使用してきた結果、現時点で考えられる特徴は上記のとおりである。

2．3．2　問題点

図1の散布図では、成績の下位群について、ばらつきが見られる。これをどのように解釈したらよいのか、なぜこのような結果になっているのか、追求していく必要がある。「聞きテスト」で取り上げる文法項目の中に、もっと平易なものを増やせば、それで解決されるのかどうか、あるいは、もっと別の要因があるのか、今後検討しなければならない課題である。

これまでの観察では、個々の学習者のタイプ（例えば、教科書を読みながら自学自習をしたタイプ、日系人のように耳からの話し言葉には、慣れているが文字を読むことが苦手なタイプ、漢字知識が、他の技能にくらべて格段に高い中国語話者のようなタイプ、など）も関係しているようである。また、比較した「プレース」が果して妥当かどうかの問題もある。

このように様々な問題を検討する必要が見えてきているのであるが、本稿では、その中で、「聞きテスト」の解答形式に問題はないか、考察していく。ことに、漢字が下位群のばらつきの何らかの要因となっているのではないかと考え、実験を行った。次章でこれについて述べる。

3．解答形式における漢字要因

3．1．研究仮説

「聞きテスト」では解答用紙に書かれている文を読む必要があるが、この場合、漢字はどのような影響を受験者に与えているのだろうか。漢字圏の受験者に有利に、非漢字圏の受験者に不利に働いているのではないか、調べてみる必要を感じた。

そこで、解答形式を漢字仮名交じり版［形式1］と仮名版［形式2］の2種類にして、以下のような仮説をたて、調べてみることにした。

仮説

1）漢字圏学習者は漢字仮名交じり版［形式1］の方が、得点が高い。

2）非漢字圏学習者は仮名版［形式2］の方が、得点が高い。

つまり、テスト結果を左右するものとして、

1）母語で漢字を使用しているかどうか

2）テスト形式が漢字仮名交じりのものか、仮名のみのものか

の2つの要因を検討することにした。

3．2．実験方法

受験者85人（1993年春期の「プレース」を受験している）を中国語話者、韓国語話者、非漢字圏話者の3つのグループに分け、さらに、それぞれを漢字仮名交じりの解答用紙［形式1］で受験するグループと、仮名のみの解答用紙［形式2］で受験するグループとに分けた。韓国語話者を独立して観察したのは、漢字知識の高い人と低い人が混在している韓国語話者の特性のためである。こうして、6グループに分けたが、各母語のそれぞれのテスト形式間（例えば、中国語話者の［形式1］で受験するグループと、［形式2］で受験するグループとの間）では、プレースの総合得点に関して、なるべく等質になるように分け、「聞きテスト」を実施した。

3．3　結果と考察

3．3．1　母語とテスト形式

以下の図2～図7は母語とテスト形式別の散布図である。横軸に「プレース」の総合得点、縦軸に「聞きテスト」の得点をとった。データ数が少ないのが難点ではあるが、傾向はわかるであろう。図6の非漢字話者、かな版には、プレースの得点は低いのに、「聞きテスト」の得点が高い受験者が一人いる。この学生は滞日がすでに長く、話し言葉には慣れており、コミュニケーション能力も高いのであるが、プレースメントテストでは得点ができないでいる。このようなケースについては、個別に調べていく必要があろう。

表2に基づき2要因（解答形式：2水準［形式1、形式2］、母語要因：3水準［非漢字、中国語話者、韓国語話者］）の分散分析を実施した結果、母語要因の主効果には有意な差が見られた（$df=2,84, F=7.070, p<.01$）が、解答形式の主効果に有意な差は見られなかった（$df=1,84$, $F=2.750$）。従って、解答形式の要因がテストの成績に影響を与えていないことから、いずれのテスト形式を用いても同じ能力を測定できるものと考える。受験者に解答用紙を配布する際、学習者の希望する形式を選ばせることにより、心理的テスト不安を解消できよう。

母語の要因については上記のような結果と考察が得られたが、果してこの結果は漢字能力を反映していると言えようか。漢字能力をプレースメントテストの上位、中位、下位の3群に分けて、次のような分析を進めた。

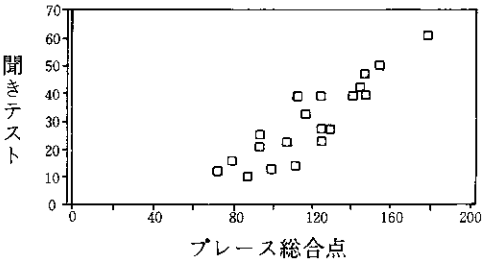

図２．中国語話者　仮名版

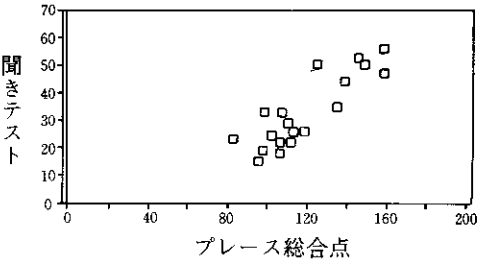

図３．中国語話者　漢字仮名交じり版

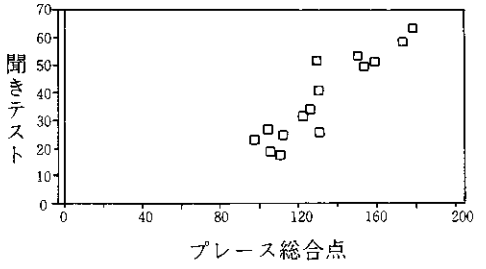

図４．韓国語話者　仮名版

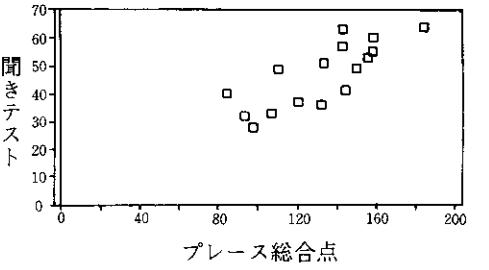

図５．韓国語話者　漢字仮名交じり版

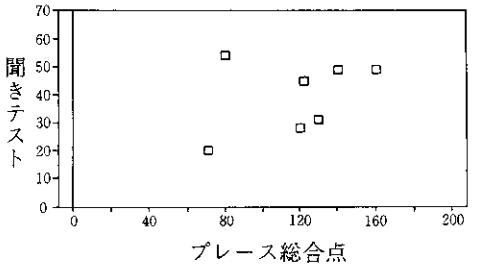

図６．非漢字圏話者　仮名版

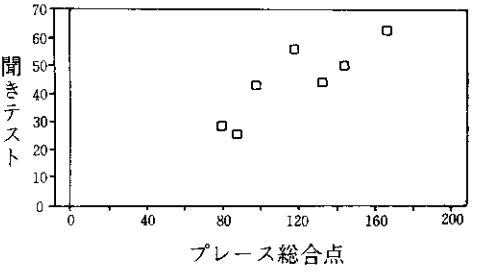

図７．非漢字圏話者　漢字仮名交じり版

表２　母語と解答形式別「聞きテスト」得点及び「プレース」総得点の平均値

		非漢字	韓国	中国
形式１ 漢字仮名交じり版 グループ	プレース 総得点	(n=7) 117.57	(n=16) 132.19	(n=19) 118.55
	聞きテスト 総得点	44.14	46.75	32.89
形式２ 仮名版 グループ	プレース 総得点	(n=7) 117.79	(n=16) 131.84	(n=20) 118.83
	聞きテスト 総得点	39.43	39.25	30.05

3．3．2　漢字能力とテスト形式

「ブレース」の漢字能力の上位、中位、下位別に、「聞きテスト」の平均値を表3のように出し、平均値の差の検定を行った。

表3．漢字能力と解答形式別「聞きテスト」得点の平均値

		上位	中位	下位
形式1 漢字仮名交じり版 グループ	聞き 総得点	(n=12) 52.67	(n=18) 34.61	(n=12) 35.58
形式2 仮名版 グループ	聞き 総得点	(n=12) 49.54	(n=18) 31.86	(n=13) 34.04

2要因（解答形式：2水準［形式1、形式2］、漢字能力要因：3水準［上位、中位、下位］）の分散分析を実施した結果、漢字能力要因の主効果には有意な差が見られた（df=2,84，F=15.544，P<.01)。一方、解答形式の主効果に有意な差は見られなかった。しかし、傾向が10％水準で見られた（df=1,84，F=3.321，P<.10)。従って、漢字能力によっては、解答形式の違いがテスト結果に影響を与えている可能性がある。漢字能力に自信がない、あるいは漢字能力が低いとわかっている受験者に対しては、形式1のテストが望ましいであろう。

4．おわりに

もともと聞きテストを作成する上では、文脈のない中での一文レベルの聞き取りという困難さを考慮して、語彙は平易に、文意は分かりやすいものを、また、解答用紙に使用する漢字も、基本的なものに限るように工夫をしている。しかも、漢字の読みはテープによって、音声で流れてくるわけで、このような聞きテストにおいては、漢字はさしたる差をうむ要因ではなかったと、結論づけられるかもしれない。

また、通常の日本語学習のプロセスを踏んできた学習者の場合、漢字ができる人は日本語能力も高いというのが一般的でもある。ただ、中には、例えば、日系人のように、耳から家庭内の話し言葉だけを学んできた人、また、会話に重点をおいて学習してきた人の中には、話し言葉の能力と比較して、極端に漢字力の弱い場合もあり、このような人には、漢字仮名交じり版よりは、仮名版の方が、実力を発揮しやすそうである。

従って、解答用紙はやりやすい方を学生に選ばせてもいいし、どちらでも問題はないといえる。このようにして「聞きテスト」を実施し、別途、漢字及び読解についてチェックをすれば、かなり

妥当なクラス分けができると考える。

プレースメントテストが必ずしも妥当なテストであるという保証はないのであるが、今回は一応これを基準として、聞きテストを検討してきた。中には、プレースと非常に大きくずれた結果を出している受験者もいるので、今後、このような学生のケーススタディも併せて行っていきたいと考えている。

また、出身の国によっても、学習スタイル、母語などの影響で、得点分布に特徴がありそうである。今後の研究の課題である。

日本語クラスのクラス分けに際しては、プレースメントテストを行うのが通常のやり方であろうが、しかし、例えば来日遅れで「プレース」を受験できなかった場合や、初級コースに配置されている既習者への対応を、即、判断しなければならない場合などに、この「聞きテスト」は役に立つものである。

研究が進み、この聞きテスト結果から、他の日本語能力テスト結果を推測できるようになれば、簡易テストとしての利用価値が高まるのではないだろうか。

注

1）初級文法項目は日本語教育学会（1991）の文法シラバスに基づくものである。

2）対話形式を6問含めたのは、1文よりも文脈が分かりやすいのではないかと考え、実験的に含めた。しかし、この場合、対話文の方が、得点率が高いということはなかった。

3）補講日本語クラスは1993年度現在、このように4レベルに分けられており、各レベルに対応した、技能（読解、会話、聴解、作文、漢字）及び、文法のクラスがある。これらの使用テキストから、およそのレベルの見当が付くであろう。

ＳＦＪ（Situational Functional Japanese），凡人社

総合日本語 初級から中級へ（水谷信子著），凡人社

表現文型（日本語表現文型），イセブ

「生」教材（新聞、雑誌、テレビ、等）

参考文献

1．小林典子・フォード順子（1992）「文法項目の音声聴取に関する実証的研究」『日本語教育』78号、日本語教育学会

2．フォード順子・小林典子（1993）「日本語学習者による文法項目の習得に関する一考察　－文法能力集団別の習得度の差－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8号、筑波大学

3．村上隆（1991）「良いテストはどのような性質をもつか」『日本語テストハンドブック』（編）日本語教育学会　大修館書店

4．日本語教育学会（1991）『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社

〔資料〕解答用紙［漢字仮名交じり版］

1．そこ(　)何をしてるんですか。
2．あの人は日本では有名(　)人ですよ。
3．今夜、映画見(　)行かない？
4．その中(　)なに入ってんの？
5．となりの人(　)教えてもらったんです。
6．あのグリーン(　)スカート、いいなあ。
7．指導教官の先生(　)はもう会いましたか。
8．木村先生に会(　)ればいいのですが。
9．「ＴＩＳＡ」っていうの(　)知っていますか。
10　あのコーヒー(　)おいしい店、名前何だっけ？
11．あしたは、ちょっと大事(　)用があって行けないんです。
12．ほら、あの窓(　)ところにいるでしょう。
13．郵便局のところ(　)曲がってください。
14．あそこに地図がはって(　)りますよ。
15．好きな人(　)もいるの？
16．肉の色(　)変わったら、火を止めてください。
17．彼ったら、えらそう(　)ことばかり言って。
18．きのうは一日中そうじ(　)せられて、大変だった。
19．約束してたの(　)来なかった。
20．旅行の申し込み書なんですけど、これ(　)いいですか。
21．毎日手紙を書く(　)とにしよう。
22．来週の会議については、あとで(　)連絡します。
23．いま説明したのが、この茶色(　)見えるところです。
24．それはそう(　)と思います。
25．何やり始める(　)と思ったら、なあんだ。
26．会議があったこと、すっかり忘れ(　)た。
27．留学生(　)とって筑波は住みにくいところです。
28．きょうはもうそのぐらい(　)して、早く帰ろう。
29．新聞を読んでも、本当のことはなかなかわからない(　)けです。
30．部屋代は東京(　)ど高くないです。
31．これからはもっとがんばら(　)きゃ。
32．出たけ(　)うとしたら、電話がかかってきた。
33．君の(　)いで遅れちゃったよ。
34．アルバイトっ(　)いえば、このあいだの話、もう決まった？
35．子ども(　)なんかわかるわけないだろう。
36．必ずしもよくなるとは(　)ぎらない。
37．うちの母も、もう60(　)し。
38．これはうちの問題(　)ありまして、そちらには関係のないことです。
39．いまの(　)までだいじょうぶでしょう。
40．あの人、結婚しない(　)じゃないの？
41．ゴミの問題はひどくなって(　)く一方だ。
42．はやく行っ(　)って、なんかもらえるわけじゃないし。
43．今度のアパート、場所(　)いいんだけどね。
44．そりゃ、外国人(　)あなたにはいいかもしもれないけど。
45．今後それをどのように証明できる(　)が、最大のポイントとなります
46．私たちも何かす(　)きだ。
47．うん、思った(　)りずっと進んでるな。
48．就職した(　)らといって、勉強が終わったというわけじゃないよ。
49．それだけでは終わりそう(　)ないですね。
50．私に言えない(　)うなことでもあるの？
51．早く国へ帰りたいなあなん(　)思ったりします。
52．すみませんが、ちょっと手伝っていただ(　)ませんか。
53．作ってはみた(　)のの、あまりいいプログラムじゃなかった。
54．私のこと聞いたんでしょう、彼(　)。
55．あいつ、酒飲んで寝ちゃっ(　)さ。
56．この調子なら、おれ、どんどん読(　)ちゃいそう。
57．いやだけど、どうしてもやら(　)るをえないんだ。
58．人口が増えるに(　)たがって、住みにくくなってきた。
59．だから、私はそういう(　)うに思いました。
60．Ａ：あのう、田中さんという方は？
　　Ｂ：ええと、あそこに立っている人(　)田中さんです。
61．Ａ：先週山に行ったんですよ。
　　Ｂ：だれ(　)いっしょに出かけたんですか。
62．Ａ：家事やりますか。
　　Ｂ：せんたく(　)かはしますけど、そうじはしませんね。
63．Ａ：そのけが、どうしたの？
　　Ｂ：自転車に乗って(　)、ころんじゃった。
64．Ａ：毎日ひまでひまで。
　　Ｂ：じゃ、あしたどこ(　)行かない？
65．Ａ：ねえ、この話知ってる？
　　Ｂ：うん、きのうの新聞(　)出てたよ。